事例26　　内容項目1-(2)　希望・強い意志

「心に響く道徳」の授業実践

道徳　第３学年
津幡町立津幡中学校・教諭

1　事例の概要

道徳の授業とは、生徒たちが資料を通して、自分の心を磨き高める時間だと言える。資料の主人公の行為や気持ちについてクラス内で友達と話し合うことにより、主人公と同じ状況のときの自分自身の行為や気持ちを考えながら価値を内面化する。そして、資料の主人公に共感しながら道徳的価値について思考・判断し、その価値を主体的に自覚するようなものでなければならない。したがって、「心に響く道徳」の授業とは、生徒が資料の主人公と一体化しながら、人間としての在り方や生き方の基礎となる道徳的価値を学び、その価値について自覚を深める授業でなくてはならないと考える。

2　実践内容

(1)　指導上の工夫

①「心に響く道徳」の授業を実践していくにあたって

生徒たちにとって「心に響く授業」を実践するに以下のことが重要であると考えた。

・生徒の実状をふまえ、今何を考えさせるべきか教師の「思い」「ねらい」が明確な授業
・生徒の興味・関心を引く資料、素材の開発、工夫
・生徒同士での意見交流、心の交流が行える（グループ学習等）授業形態の工夫

②「心のノート」を活用

実態から考えると、「心のノート」を上手く活用できている状況とは言えないが、以前と比較して、使う頻度は多くなってきた。それは、心のノートに記載されている言葉を使って本時のねらいや本時の価値内容項目をまとめることで、生徒がより身近に授業での道徳的価値を受けとめられるようになってきたからである。また、心のノートを活用した個に応じた指導に取り組むことにより、教育活動全体との関連及び、家庭との連携を図りながら道徳的実践力を高めることができると思う。

③ 評価の工夫について

学習指導要領に「道徳の時間に関して数値などによる評価は行わないようにする」と記されている。評価においてはワークシート等により一人一人の価値の自覚の深まりをとらえ、道徳的な心情、判断力、実践意欲などの高まりを見取りながら、指導と評価の一体化を図っていきたいと考える。そして、指導方法の改善、授業後の個に応じた指導に生かしていきたい。

3　指導の実践例

(1)　目標

・より高い目標を実現するために、自分のもっている力を精いっぱい発揮して、最後までやりぬこうとする心情を育てる。

(2)　展開

学　習　活　動	時	生徒の主な意識の流れ	支援と評価
１．目標を達成できなかった経験を話す。	１０	（目標を決めたのに、できなかったことはあるかな） ・あるよ、マラソン大会で思っていた順位にはならなかった。 ・漢字テストもそうだよ。	・目標を達成できなかった経験を振り返えさせることで、できなかった原因に目を向けさせる。

２．「原田選手のジャンプ」について話し合う。 ・オリンピック選手になるまでの努力 ・リレハンメルでのジャンプ失敗	２５	（この映像を見てごらん） ・スキーのジャンプだ。 ・この人、知ってるぞ。原田だ。 （オリンピックに出るために原田選手はどうしたのかな） ・日本の代表なんだから、きっとすごく練習したと思う。 ・イチローのように努力し、工夫したと思う。 （原田選手は金メダルを取れたかな） ・取れたよ。　　・取れないよ。 ・実は失敗してしまったんだな。	・ビデオ映像を見せてジャンプのイメージをつかませる。 ・努力について想起させ、オリンピックの選手になるまでの原田の努力を想像させる。 ・資料を読み、中学生でもとべる距離で金メダルだったという状況をつかませる。

Ｃ－１　指導案「目標に向かって～原田選手の涙～」　　**Ｃ－２　指導案「かけ合う一言の大切さ」**

４　成果と課題

(1)　成果

グループ学習を意図的に行うことによって、生徒一人ひとりの考えの共有が小グループでできた。また、その後の課題解決学習へと、クラス全体としての意識がまとまっていった。 生徒の挙手・発言をリレー形式で行うことによって、様々な意見、感想が話し合うことができた。そして、時間配分も上手くとることができた。 グループ学習 ←→ 個人で考える場といった授業形態を随時変えていくことで、「間延び」しない授業を実践することができたといったことが挙げられる。ここでは、オリンピック、スキージャンプの日本代表選手、原田雅彦氏を取り上げた。原田氏について子ども達は、テレビや新聞等のマスコミで知っているかもしれないが、長野オリンピックで金メダルを取るまでの挫折感を乗り越えた努力については知らないと思う。４年に一度しかないオリンピックの本番で金メダルを目前にジャンプで失敗し（リレハンメル）、チームに迷惑をかけたという屈辱をばねに、その後の４年間、想像を絶するような努力をしたこと大きなプレッシャーの中、目標に向かってひたむきに努力し戦っていたことを知る。生徒はすぐに効果があがらないと投げ出す自分の努力の足りなさや、失敗するとすぐにあきらめてしまう自分の姿をふりかえることができ、困難にぶつかった時にどうする（どう生きる）ことが大事なのか気づくことができた。

(2)　課題

道徳の授業は、教師自身が難しいと捉えてしまうと、生徒達にとっても難しくなってしまうものである。授業における「ねらい」を明確にし、どういう心を育みたいか、大きな視野、そして流れで教材研究することが大事になってくる。また、生徒たちが目を輝かせて学習問題に取り組めるように、素材や学習問題の工夫も重要になってくる。生徒たちの道徳における、興味・関心を上手く引き出すことが我々教師にとって急務なことであり、今後の課題になると考える。「人間性豊かな心」を育むため、私なりに「心に響く道徳の授業」をモットーに授業を行っているわけであるが、いくつもの課題が見えてきたのも事実である。とくに、生徒が将来に向けての実践的な力を育むための授業づくりが大事である。また、授業において本音が語り合えるようなクラス作り、雰囲気作りが大事であると思う。「みんなちがってみんないい」そんな価値観を生徒たち皆が共有できれば、道徳の授業が「いつも楽しい、面白い」「将来自分にとってきっと役立つ時間」と思えるようになるのではないだろうか。このような授業づくりを目指しているが、現実は思うように進まない。事例のねらいにあるように目標に向かって最後まであきらめない強い意志を持つことから、道徳的な実践力の育成につながるような、生徒のよりよい変容をしっかり見つけ、捉えられることが課題である。